

OKADA Kyunan: Kii Wakaura Meisai Shin Chizu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西本, 真一, 西本, 直子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1422

岡田久楠「紀伊和歌浦明細新地図」

OKADA Kyunan: *Kii Wakaura Meisai Shin Chizu*

西本 真一*¹ 西本 直子*²
NISHIMOTO Shinichi*¹ NISHIMOTO Naoko*²

歴史的建造物の保存活用 「名所旅館案内和歌浦地図」 紀州藩
明治大正期 紋別 北海道開拓

1、はじめに

あしべ屋妹背別荘における建造物の増改築を研究する中で、この旅館の明治大正期における最盛期の姿を最も強く示唆する地図が岡田久楠による「紀伊和歌浦明細新地図」であることを拙稿で述べた（「和歌の浦『あしべ屋』の増改築の過程」2014:101-104）。この地図は和歌山市立博物館における展覧会のカタログ「和歌浦：その景とうつりかわり」（2005）で52頁の全体を用いて提示された他、島津俊之の論文「経験とファンタジーのなかの和歌浦：田山花袋『月夜の和歌浦』を読む」（2011:67）でも図版の扱いが大きい。また「よみがえれ和歌の浦：景観保全訴訟全記録」（1996:286）で見る通り、裁判記録の証拠としても提出された経緯がある史料である。明治大正時代の和歌浦を問う各々の場において重要とみなされている点は論を俟たないであろう。

だが一方で、この地図には第二版（改訂版）があることや題名を変更した第三版の存在に関し、これまでは田中修司の論文「森田庄兵衛による新和歌浦観光開発について」（2009年）で数行にわたって紹介されただけに留まっているように思われる。

本稿では、特に紋別市においておこなった史料の渉猟などを通じ、明らかとなった諸点を述べる。

2、史料の比較

田中修司が論文の註26にて指摘している(297)ように、岡田久楠の「紀伊和歌浦明細新地図」には初版と改訂版とがあり、また題名を「名所旅館案内和歌浦地図」に変えた第三版も出版されている。

調査をおこなったところ、和歌山県立図書館、和歌山市立博物館、香川県立ミュージアム、西尾市岩瀬文庫の4箇所収蔵されていることが了解された。地方史の史料集を構築している溝端佳則氏は2点を所蔵していた。また1点については芳賀啓が「古地図研究ニュース」にて掲載していた。その他3点は筆者たちが購入した。

前述の通り、「紀伊和歌浦明細新地図」の初版は2種類あり、同じ題を持つ再版（第二版）が作成されている。第三版の題は「名所旅館案内和歌浦地図」と変えられている。合計10点の分類は以下の通りである。

「紀伊和歌浦明細新地図」初版：2点
和歌山県立図書館
和歌山県立博物館

「紀伊和歌浦明細新地図」初版の改版：2点
溝端佳則氏所蔵
筆者蔵

「紀伊和歌浦明細新地図」再版（第二版）：2点
香川県立ミュージアム
筆者蔵

「名所旅館案内和歌浦地図」（第三版）：4点
西尾市岩瀬文庫

「古地図研究ニュース」54（2007:6、添付地図）掲載
溝端佳則氏所蔵
筆者蔵

「紀伊和歌浦明細新地図」の初版は暖色系による多色刷の石版印刷によるもので、左枠外の最上段の「不許複製」の下に「明治四十二年十月廿九日印刷」、「明治四十二年十一月三日出生」と並べて記されている。同中段には「著作兼発行者 和歌山縣和歌山市新堀二丁目八番地 岡田久楠」、「印刷者 和歌山縣和歌浦町八百八十七番地 宇治田幸八」とある。同下段には「和歌山市元寺町二丁目五番地」、「石版所 加藤捷邦」と2行を並べている。しかし初版の改版では「印刷者 和歌山市元寺町二丁目五番地 加藤捷邦」となっており、和歌浦町八百八十七番地の宇治田幸八の記載が削除されている。

*¹ 建築研究所客員研究員、日本工業大学建築学部教授 *² 建築研究所客員研究員

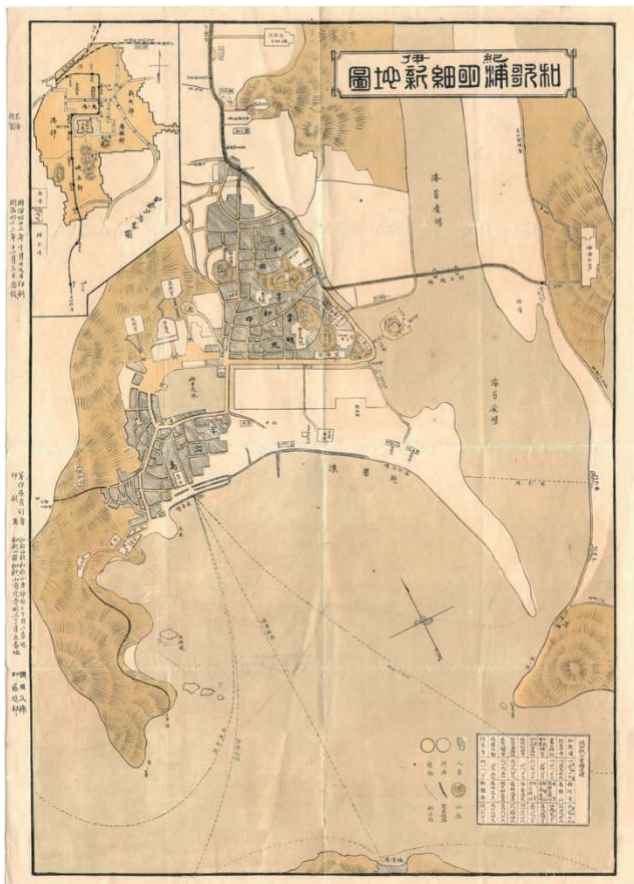


図1：「紀伊和歌浦明細新地圖」初版の改版

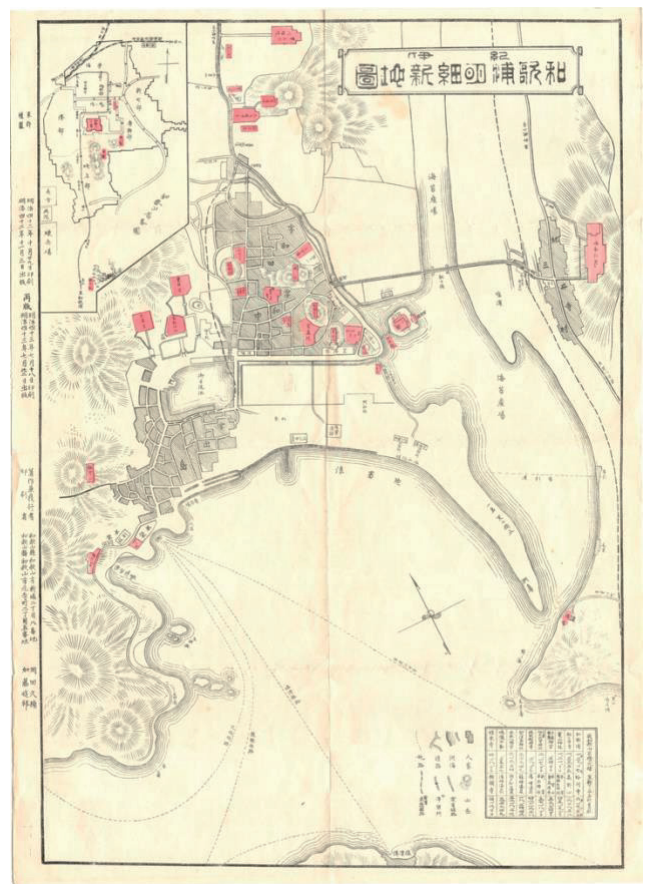


図2：「紀伊和歌浦明細新地圖」再版（第二版）

初版の改版ではこのように「改訂」を想起させる語句はまったく見られない。再版にはしかし、初版の年月日の下に「再版」と明記されて「明治四十三年七月十八日印刷」、「明治四十三年七月廿二日出版」という日付が記される。この再版は色数を減らして地図の見かけを一変させており、海岸沿いに水面の深さを示唆する表現を加えている。新和歌浦方面へと延長予定の路面電車を点線で示しているのが興味深い。寺社や主だった山、それに三断橋や不老橋といった古い構築物に朱色を重ね刷りし、強調をおこなっている。望海楼に明光台エレベーターを描き加えている点も見逃すことができない。初版の出版は明治42年11月3日であり、わずか8箇月ほどの後に再版を出し、またその間に修正版の刊行もなされている。矢継ぎ早に変わる和歌浦の最新の様子を知らせることを第一に置いているかのような印象が与えられる。

さて第三版の枠外左端では初版と再版の日付とともに「三版」という語が入り、「明治四十五年六月八日印刷」、「明治四十五年六月十四日出版」と記載されている。その下の「著作兼発行者」にある岡田久楠の名と住所に変わりはなく、印刷者は「大阪府堺市櫻ノ丁西一丁目廿七番地武田卯之吉」に改められている。地図のケバによる山の隆起や水深の表現はさらに手が加えられている。新和歌浦の旅館も増え、トンネルも新しく描かれている。

3、鈴木商店

「紀伊和歌浦明細新地圖」の初版の改訂はおそらく明治43年になされたのであろうが、その際に鈴木商店が削除された。藤本清二郎「和歌浦の風景：古写真でみる『名勝』の歴史」(1993:37)に「かぎじゅう」の屋号とともに紹介されているこの醤油屋の引札が残る(図3)。

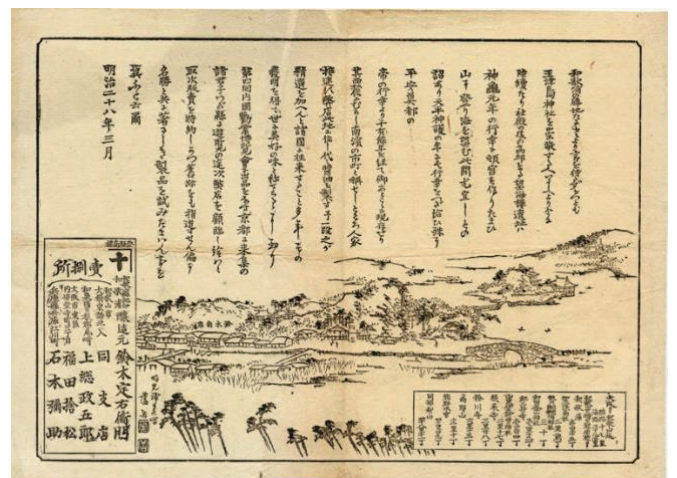


図3：鈴木商店引札（明治28年、著者蔵）

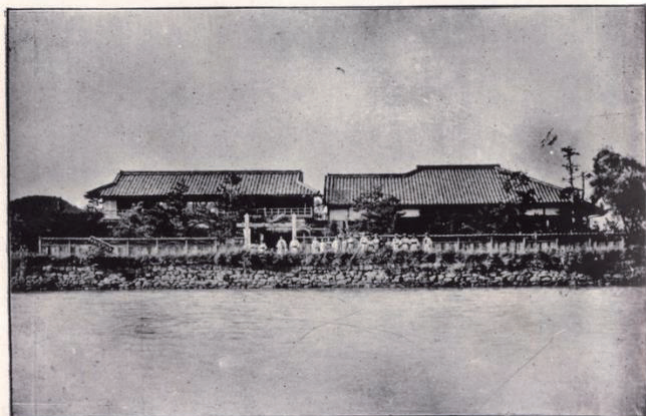
地図の改変は、明治43年の頃に鈴木商店がこの地域からなくなったことを示唆しており、重要である。あしべ屋

妹背別荘の奥座敷にかつて描かれていた梅戸在貞の壁貼り付け絵の裏貼りに、あしべ屋の古い帳簿が用いられていたことは拙稿「和歌の浦の妹背山をめぐる史料」(2018:176-178)や「あしべ屋妹背別荘の台風21号災害復旧報告」(2020:18-19)で述べたが、「かぎじゅう」の屋号がここでも散見され、帳簿の記された年代の判定に関連すると思われる。今後のさらなる追究が必要である。

4、あしべ屋別荘となった湊御殿

岡田久楠の地図には妹背山のあしべや別荘の北側にも「あしべや別荘」が描かれているが、これは養翠園に現在は移築された湊御殿である。もともと江戸時代末に今の和歌山市湊御殿に建てられた御殿の一部が明治時代初年になると和歌浦東に移築され、あしべ屋の別荘「旭館」として用いられたらしい。大阪市汎愛尋常小学校が出版した「臨地教育記念帖」(1920:2)には、明治44年に児童47名が2週間泊まったことを伝えている。

「翌四十四年八月和歌浦妹背山對岸芦邊屋別荘旭館ヲ選定シ、第三回臨海學舎ヲ開設シ、同年八月七日ヨリ二週間一人ノ費額六圓七拾錢ト定メ兒童四十七名ヲ收容シ、是亦豫期ノ好果ヲ得タリ。」



宿舎 / 舎學海臨愛汎ルケ於 = 浦歌和



讀奉語勅朝日

図4(上)、図5(下):「汎愛臨海學舎記念帳」より

汎愛尋常小学校「汎愛臨海學舎記念帳」(1911)では多数の写真によって当時の様子が分かり、大変熱心な教育がおこなわれたことが了解される。汎愛尋常小学校は最新の教育を施す施設として良く知られていた(川島智生「近代大阪の小学校建築史」(大阪大学出版会、2017);長澤悟監修「子どものための建築と空間展」(鹿島出版会、2019)などを参照)。大正15(1926)年には安井武雄の設計による新校舎が竣工したが、充実した施設と空間の配慮は広く注目を集めた。

湊御殿が和歌浦東にあった時、短期間であれ、実際に宿泊施設として用いられたことは貴重な情報であり、またその時に「旭館」と呼ばれていたらしい点は「あしべ屋・あさひ屋」の二軒の茶屋が三断橋のたもとに江戸時代初期に立てられたことを思い起こさせる。紀三井寺から妹背山の亀岩への船渡しが長年続けられたが、明治時代に「あさひ橋」が完成することによって陸続きとなった点も関連するように思われ、引き続き検討をおこないたい。

5、岡田久楠

地図の作成者である岡田久楠については詳細が不明である。かつてないほどに活気を呈するようになり、観光客が押し寄せ、これに追いつこうとして急速に変転を遂げようとした和歌浦の最新情報を地図に定着させたかったらしいが、明治時代の末期にこの名を持つ者は唐突にあらわれる。

金子信尚「北海道人名事典」(第2版、1923:38-39)では次のように紹介している。

「旧姓は貴志と称す明治十七年三月二十八日和歌山県和歌山市小松原通六丁目に生る同三十五年七月北海道庁事業手拝命土木部勤務となり河西土木派出所に在勤す(明治)三十七年六月小樽区役所に入り同年十一月空知支庁に転じ(明治)三十八年五月再び道庁に入り岩内支庁に在勤し翌六月東京市役所土木課に転じ(明治)三十九年亦道庁に奉職し増毛土木派出所に在勤す(明治)四十年上川土木派出所に転勤同四十二年四月土木技手翌四十三年五月北海道庁技手拝命土木部に勤務し大正七年度路課及び河川課勤務となり現在に至る南六條西五丁目に住す」

因みに、同書の初版には岡田久楠の名はない。岡田は和歌山生まれであった。しかしなぜ、北海道に渡らねばならなかったのかは分からない。「紀伊和歌浦明細新地図」が発行された明治42年は北海道に勤務している時期である。距離を隔てた和歌の浦の地図を作成するには何らかの意図があったはずである。

和歌山(紀州)と北海道との間には、明治時代の初期に関わりがあった。

明治政府は北海道開拓について、和歌山に紋別を担当させたことがある。しかし遠隔の地にあり、開墾には多額の費用がかかる。和歌山県はこれに対して一度は北海道に出かけたが、すぐに、もともと温暖な地に育った県民で、北海道の寒冷気候での作業は不慣れで難しいことを告げたという。

北海道の分領支配は江戸が終わった直後の明治2年から4年までのわずか2年間であり、岡田が紋別を訪れたのはその後30年以上経過した明治43年であるが、岡田と紋別の結びつきの伏線として重要なことのように思われる。和歌山では高倉新一郎が「北海道開進社顛末」(1957)に記述しているように、明治12年に北海道開進社を設立した士族・岩橋轍輔も認められる。

紋別市史編纂委員会「紋別市史」(1960:997-998)によれば、明治19(1886)年に道内を視察した当時の外相の井上馨と内相の山県有朋が、北海道の開拓を進めるためには航海を容易にして運賃の高騰を防ぐ必要があり、オホーツク海岸には港はおろかひとつの灯標もない事態を改善すべきで、そのためには測量技師を招聘して港湾整備を進めるべきであるとする意見書を提出した。これを受けて、同庁初代長官・岩村通俊が明治20年、イギリスから港湾技師C.S.メークを招き、全道沿岸の調査測量を命じた、とある。メークはこの時の調査報文で紋別よりも網走が港湾築設に適していると報告している。この調査に基づき岩村は港湾修築構想を纏め、26年には北垣長官による北海道拓殖12年計画、34年の園田長官の北海道10年計画、42年の川島長官による第一期拓殖計画と、常に港湾修築は重視された。

明治39年、紋別では船着き場に棧橋を設けて商売をしやすいとしようとする人々から棧橋架橋の要望が起こったことがきっかけで紋別築港運動が始まる。紋別市史編さん委員会「新紋別市史」上巻(1979:883-884)によれば、明治40年には寄港した大阪の木材積取船第一共栄丸(2332トン)が大しげに遭い挫傷・沈没し、避難施設もなかったために悲劇的な事故となった。明治41年には網走と共願で、北見鉄道敷設と紋別築港の2件が紋別地方開発として議会で採択された。同40年に道庁港湾課技師・佐藤勇次郎が、43年に岡田久楠が紋別を訪れ、初期の港湾調査を実施したにはこうした背景があった(網走開発建設部紋別港湾建設事務所「オホーツクの港もんべつ」(1991:103)など)。

築港案が具体的に検討されるには大正10年を待たねばならず、道庁技師・平尾俊雄による漂砂の調査が行われ、鹽見為紀治「紋別町史」(1944:152-153)にも書かれているように、道庁技師・伊藤長右衛門による設計をもとに、大正11年、宮尾舜治本道拓殖改訂計画により、1193668円の予算で大正12年から15年の3年をかけて完成された。予算に関しては「紋別港湾修築計画之概要」北海道庁(1923)の裏面に同額が記述されている。

少なくとも岡田の仕事は、窮状にあった紋別市民から喜

ばれていた点が伺い知ることができる。明治43年に作成された紋別港修築平面図は紋別市立博物館に青図として残されていた。おそらく、この図の発見があって初めて岡田久楠の功績が世に知られることになったのであろうと推定される。

だが、北海道に勤務していた岡田久楠と、観光に沸く当時の動勢に従って次々と和歌浦の地図を作り変えていった岡田久楠の姿は、うまく重ならないように感じられる。これも今後の課題のひとつとして捉えたい。

まとめ

以上、「紀伊和歌浦明細新地図」の初版の2種類の存在、同題の再版があること、及び「名所旅館案内和歌浦地図」が「紀伊和歌浦明細新地図」の第三版であったことを記した。さらに初版の改訂で地図から削除された「かぎじゅう」こと醤油屋を営んでいた鈴木商店の和歌浦から消えた時期に関して注意を促した。湊御殿が和歌浦東に立っていた頃の情報も加えた。岡田久楠という人物についても少々触れたが、この点については史料の渉猟を重ねたい。

謝辞

香川県立ミュージアムと西尾市岩瀬文庫には収蔵品の閲覧と写真撮影の御許可をいただいた。記して御礼申し上げます。

紋別市立博物館の小林健一氏には貴重な史料の数々を御教示いただき、また閲覧と写真の撮影許可をいただいた。厚く御礼を申し上げます。

溝端佳則氏にはコレクションの閲覧と写真の撮影に関する御許可をいただいた。心より感謝申し上げます。

参考文献

網走開発建設部紋別港湾建設事務所「オホーツクの港もんべつ」(株)オホーツク設計、1991年。

大阪市汎愛尋常小学校「臨地教育記念帖」大阪市汎愛尋常小学校、1920年。

岡田久楠「紀伊和歌浦明細新地図」岡田久楠、1909年。

岡田久楠「名所旅館案内和歌浦地図」岡田久楠、1912年。

金子信尚「北海道人名事典」第2版、大正12(1923)年。

川島智生「近代大阪の小学校建築史」大阪大学出版会、2017年。

鹽見為紀治「紋別町史」紋別町役場、1944年。

島津俊之「経験とファンタジーのなかの和歌浦：田山花袋『月夜の和歌浦』を読む」空間・社会・地理思想14、2011年、41-67。

高倉新一郎「北海道開進社顛末」経済学研究11(1957)、1-27。

田中修司「森田庄兵衛による新和歌浦観光開発について」日本建築学会計画系論文集74:635、2009年、291-297。

長澤悟監修「子どものための建築と空間展」鹿島出版会、2019年。

新沼文次郎「北見紋別町誌 附紋別漁港調査書」新沼文次郎、1921年。

西本真一・西本直子「和歌の浦『あしべ屋』の増改築の過程」武蔵野大学環境研究所紀要3、2014年。

芳賀啓「明治末期の和歌浦(添付地図解説)」古地図研究ニュース54、2007年、6。

汎愛尋常小学校「汎愛臨海學舎記念帳」汎愛尋常小学校、1911年。

藤本清二郎編「和歌浦の風景：古写真でみる『名勝』の歴史」東方出版、1993年。

紋別市史編纂委員会「紋別市史」紋別市役所、1960年。

紋別市史編さん委員会「新紋別市史」上巻、紋別市長役所、1979年。

「紋別港湾修築計画之概要」北海道庁、1923年。

米田頼司「名所絵葉書にみる景観と景観変容：『溝端コレクション(和歌の浦)』とその内容分析」紀州経済史文化史研究所紀要33、2012年、1-34。

和歌の浦景観保全訴訟の裁判記録刊行会編「よみがえれ和歌の浦：景観保全訴訟全記録」東方出版、1996年。

和歌山県教育委員会「和歌の浦学術調査報告書」和歌山県教育委員会、2010年。

和歌山市立博物館「和歌浦：その景とうつりかわり」和歌山市立博物館、2005年。